

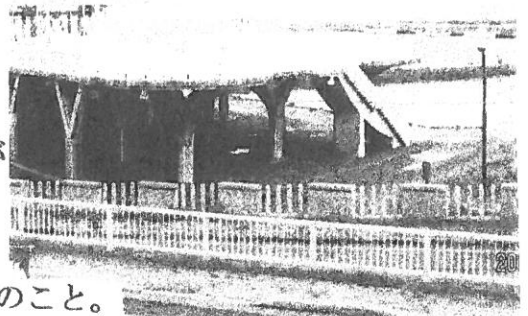
# “奥尻の大津波からの復興”に学ぶ

視察報告

千葉県議会議員ふじしろ政夫

平成5年7月12日午後10時17分にマグニチュード7.8の地震(震源の深さ34km)が発生し震度6の烈震と29mにも及ぶ津波の被害を受けた奥尻島を訪れました。(千葉県議会津波議連で9/6~7)

「奥尻津波館」では高田女史から説明を受けました。青苗地区には1分24秒の間強い縦揺れ、地震発生から5分で13mの津波が時速500kmのスピードで襲ったとのこと。更に原因が不明だが(ガスボンベか?船の油か?)火災が発生し全域が消滅した様子を話してくれました。島全体で死者172人行方不明26人。被害総額は664億円とのこと。



地震発生時、奥尻町の町役場の係長の立場で対応した竹田さんからもお話を聞きました。地震発生から13分ほどで全島(西も東も)に津波が襲ったとのこと。津波の高さは7mから29mまでその場その場での高さがあったとのこと。藻内地区が最大で29mとも31mともいわれています。今も其の地区の海のそばの山に23.3mとの津波到達点の看板を見ることができました。

平成10年3月には完全復興宣言をしたのですが、其の復興の様子もお聞きしました。青苗漁港のそばには「望海橋」がつけられていました。一階部分は柱だけで“人工地盤”を造りそこへ駆け上がって山の方に逃げるような施設です。事業費は23億円かかったとのこと。又、青苗小学校も一回が柱だけのピロティ式の3階建ての学校が国からの補助をもらって建てられました。防潮堤は集落のあるところに造られており、集落のない所にはつくられていません。しかもその場の津波の高さに合わせて9.1m~6.4m~23.3m~11.7m~3.2m~7.0m等です。そして其の防潮堤と同じ高さの道路がつながっていました。

防潮堤の作り方は、例えば11mの高さのものを造るときその周辺は海拔2m+6mのかさ上げをして街づくりをしています。しかも防潮堤の近くには家を建てさせません。それで圧迫感がないとのこと。防潮堤と合わせて川の河口には自動で閉まる水門が造られていました。

津波対策としてどこまでやるのか?どこまでのことをすればよいのか?今、東北三県での防潮堤の造り方を見ると“減災・防災”と“漁業”との関係をどう調整するか、決断を迫られているようです。奥尻ではまず集落は防潮堤を造りあげ5年間で復興宣言をしたのですが・・・住民との話し合いにも多くの課題があったようです。

「漁港に一日も早く共同作業場(ウニ等の)を、ストックヤードを造ることが、復興への意欲が住民にも出てくることになるのです」「仕事にかかわれる事の気持ち大切です」との竹田さんの説明に、東日本大震災後の対応のありようにとって必要なことが示唆されていると思われました。

福島の前被災地は原発事故ゆえに田んぼも耕せない、漁にも出られない状況の中

で厳しい復興が模索されている事を考えると、一人一人が仕事を、社会関係を持てることが大切であり重要なことだと感じました。

奥尻島の産業は漁業であり、観光と米作、ブドウを造ってのワインづくりが行われていました。

説明の中で具体的な地震前の人口・生産高・景気と復興後の状況を教えてもらえなかったのは残念でした。どこまで復興後の街づくりが成功しているのか？美しい静かな奥尻の自然を見て、地域の産業や自治の方向性を地域地域で作らだしていかなければと思われました。

どこまでも青い海と青い空を見、自然の美しを感じれば感じるほど自然の恐ろしさと同時に人は自然に生かされているのだという事を感じました。

## 福島第二原発 “炉内” 視察

福島第二原発を視察しました。1号炉2号炉が楡葉町に3号炉4号炉が富岡町にあります。4炉で440万kw、東芝製①③炉、日立製②④炉です。

3・11のとき1,2,3,4炉はすべて運転中、地震で自動停止、津波で電源喪失。①②④炉は冷却機能を失う。送電線4回線のうち1回線が残り3号炉のみ冷却機能を失わなかったとのこと。

核燃料はそれぞれ2500本ずつあるので4炉で10000本の燃料があり、今はすべて使用済み燃料プールに入れてあるとのこと。

3号炉の電源をケーブルでつなぐべく9kmの①②④炉へ人力でケーブルを運ぶことで危機脱出。それが3月14日とのことでした。まさに福島第一原発と同じ状況一歩手前だったのです。

第二原発は外観的には何ともないようでも、海側は津波にやられているし、又津波対策の15,4mの防潮堤もフレコンパックを積み上げて作った仮堤防。「再稼働どころではない」が現場の職員の声でした。

今は第一原発の事故対応の後方基地としてこの第二原発が機能しているとのこと。

現地を歩いての視察でした。3号炉の中に入り原子炉格納容器のふたが開いている状況もみましました。格納容器の真下をも現場に入って見させてもらいました。細かいパイプラインや機器が複雑に入り組んでいる炉の建屋内・・・どう考えても大震災には対応できないのではと思われました。やはり原発は廃炉以外ないでしょう。

視察のための出入りでも厳しいチェックがありました。



3号炉格納容器真下で